

園だより

7月号

令和4年6月30日
新宿区立西戸山幼稚園
園長 佐藤 淳穂



卵

園長 佐藤 淳穂

テラスがにぎわっているので行ってみると、子どもたちが保育室の窓ガラスに張り付いている複数の白い粒を見ていました。「うまれた！」という3歳児の声で目をやると、茶色い丸いものがぞろぞろと出てきました。虫眼鏡で見ると、その小さな茶色の正体は2ミリほどのカメムシでした。白い小さな粒は卵だったのです。どのくらい前からここに貼り付いていたのでしょうか。この奇跡の瞬間に遭遇した子どもたちは代わる代わる虫眼鏡で観察していました。

この4月から子どもたちは、いろいろな新しい命に出会ってきました。年長組のクラスでは、昨年度に引き続き、ヤモリが卵を産みました。親が卵の上に乗ってしまい、残念ながらつぶれてしまいましたが、この飼育ケースを自分の安心できる住み家にしてあげているのはうれしいことです。園内では次々にカブトムシが眠りから覚めています。昨日は4歳児のクラスで小さな幼虫から育てたアゲハチョウが誕生し、空へ見送りました。

先日は、園庭で3歳児が小さな卵をひらに卵を載せてきました。一部が割れてしまっています。この大きさからして昆虫ではなさそうだと子どもながらに考えるようでした。数名の年長組は「何の卵だろう」という疑問から逃れられなくなりました。あらゆる図鑑を見て、似たような卵を探しますがなかなかこれだ！という確信がもてません。「ちょっと待って。大きさを測る。」と言って戻ってきたAさんは指を広げて「これくらい。」と図鑑の上で頭を寄せ合う友達に知らせてくれました。「長さを測る道具だよ。」ともものさしを見せると、卵に当てて「3センチ」と言っていました。その後、タブレットでもあれこれと検索し、キジバトではないかという結論にたどり着きました。わかるまで追求しようとする子どもたちの姿勢に感心しました。

ある日、白くて丸い小さな粒を拾ったBさんは「卵かなあ」と見せてくれました。(たぶん、園芸用の軽石です。)日頃からいろいろな生き物に触れているので、まずは「卵」と考えるのは自然な発想でしょう。卵だと思えば、そこから何が生まれてくるのだろうと想像がふくらみ、わくわくした気持ちになります。命あるものととらえてみる子どもらしい感性が、そのものをよく見たり観察したりすることとともに、想像したり、相手のことを考えたりする力につながっています。

「子どもが生まれて手をつないで歩くようになって、小さなアリや草花に目が向くようになりました」とお話しされている保護者の方がいました。子どもの目線から見える世界には、これから出会う様々な出来事と向き合う入口があるように思います。子どもと一緒に見る卵には、確かに、大人だけでは気付かない価値あるものがたっぷり詰まっています。

